

水稻の作柄に関する委員会（平成29年度第2回）の意見

1 8月15日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

- (1) 気温・日照時間は、6月に一時平年を下回る期間があったものの、その後、7月中旬頃までは平年を上回って推移した。7月下旬から8月下旬にかけては、東北太平洋側から関東の広い範囲で低温・寡照となり、西日本については高温傾向となった。

今後1か月程度の天候の見通しでは、気温については、9月第1週目に低温傾向、その後は平年並みか高い、日照時間については、ほぼ平年並みと予想されている。

- (2) 本年の水稻は、早場地帯ではもみ数が一部を除き平年以上に確保されていると見込まれるものの、東北太平洋側や関東地方を中心に7月下旬以降が低温・寡照傾向で推移したこと等から、登熟や品質等への影響が懸念される。

また、遅場地帯の生育はおおむね順調に推移しているものの、高温傾向で経過し、一部で寡照傾向となっていることから、もみ数や登熟への影響が懸念される。

さらに、いもち病や紋枯病、斑点米カメムシ類等の発生が多いと予想されている地域もある。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

- (1) 早場地帯においては、出穂後の低温・寡照が登熟や品質に及ぼす影響に留意する必要がある。
- (2) 遅場地帯においては、7月以降、気温は平年を上回って推移しており、一部で寡照傾向となっていることから、もみ数及び登熟等への影響を見極める必要がある。
- (3) 7月下旬の集中豪雨や8月上旬の台風第5号等の被害が見られた地域では、その影響を見極める必要があるとともに、今後の台風や集中豪雨等による作柄への影響にも留意する必要がある。
- (4) いもち病、紋枯病、斑点米カメムシ類等の病虫害の発生が多いと予想される地域においては、その発生状況に留意する必要がある。

3 次回のもみ数確定期調査の調査期日

本年の水稻の出穂状況は、一部で早まっているところもあるが、全般的にはおおむね平年並みと見込まれることから、次回のもみ数確定期調査は、例年どおり9月15日現在とすることが適当と考える。

【参考】水稻の作柄に関する委員会委員

- (座長) 雨 宮 宏 司 公益社団法人大日本農会 技術顧問
- 黒 田 栄 喜 国立大学法人岩手大学農学部植物生命科学科（作物学研究室） 教授
- 竹 川 元 章 気象庁地球環境・海洋部気候情報課 予報官
- 中 園 江 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター
生産体系研究領域東海輪作体系グループ 上級研究員
- 平 澤 正 国立大学法人東京農工大学 名誉教授
- 山 岸 順 子 国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科生産・環境生物学専攻作物学研究室
教授
- 吉 永 悟 志 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター
生産体系研究領域 領域長